

アリストパネース『鳥』解題、翻訳、注解―(1)―

久保田 忠利

Translation of Aristophanes' *Birds* with Introduction and Notes (1)

Tadatoshi KUBOTA

Abstract

This is a prose translation of Aristophanes' *Birds* (*Ornithes* in Greek original title, *Aves* in Latin) with introduction and notes. Aristophanes is the most famous Athenian comic poet in the 5th century B. C. *Birds* was produced at the City Dionysia in the spring of 414 B. C. That the play contains rich fantasy is unanimously agreed and highly praised by critics, but the interpretation of the work differs widely. Some scholars find in *Birds* allegorical comment on the political events in 415 B. C., others see as a creation of egocentric desire to get control over everyone else. This subject will be discussed after the completion of this translation.

アリストパネース『鳥』解題

アリストパネース Aristophanes (前460–450年頃～386年頃) は前5世紀のアテーナイを代表する喜劇詩人である。現存する作品は11作品で、他に32編のタイトルが伝わるが、そのいくつかは同じ作品の異称であるか他の作者の作品と考えられている。彼のデビュー作は427年上演『ダイタレース (宴会の仲間たち)』*Daitares* (断片のみ残存) である。現存するもっとも古い作品は前425年上演『アカルナイの人々』*Akharnes* (アカルネース) である。

今回の翻訳と注解の対象とする『鳥』*Ornithes* (オルニーテス) は前414年の上演である。この間の事情に関してはヒュポテシス (古伝梗概) I が次のように伝える。

「この劇 (『鳥』) はカリアース Kharias がアルコーンのときに (前415–414年) カッリストラトス Kallistratos によって都市 (のディオニューシア祭) において上演された、かれ (カッリストラトス) は『鳥』によって2位で、1位は『コーマスタイ (浮かれ騒ぐ人々の群)』

Komastai によってアメイプシアース Ameipsias¹⁾、3位は『モノトロポス (一人暮らし)』*Monotropos* によってプリューニコス Phrynikhos であった。」

これによると、上演が前414年であることはアルコン・エポーニュモス (その年度を示すために名前を挙げられる筆頭執政官) の名前によって間違いないと思われる²⁾。また、上演された祭が「大ディオニューシア」祭³⁾ (「都市のディオニューシア」祭とも呼ばれる) であり、2位となり優勝できなかったことが分かる。

コンテストの結果からすれば必ずしも大成功を納めた作品とは言えないが、後代の批評家たちは、この作品に見られる奔放なファンタジーとコロスの歌の優れた抒情性を高く評価する点ではおおむね一致している。

しかしこの作品をめぐる解釈は、実に多様である。一方の極にはきわめて政治的な解釈、すなわち同時代へのアレゴリーに富んだ作品とする立場があり、他方の極には全く非政治的な作品とする立場、すなわちファンタジーによる現実逃避、あるいはファンタジーによる利己的な欲望の実現とするものまで幅広い解釈が提出されている。このような解釈の多様性を生む原因は主として二つ考えられる。一つは、『鳥』の上演された時代背景であり、もう一つは、天空に『鳥』のポリスを建設するという作品のファンタスティックな状況設定であり、この時代と作品の関わりをどのように捉えるかによって解釈は大きな振幅を持つことになる。

大ディオニューシア祭のコンテストに参加する悲劇および喜劇の詩人が決定されるのは、通常新しいアルコン・エポーニュモスの就任後すぐであったから、アリストパネースの『鳥』の場合、前415年の夏のことである⁴⁾。コンテストの参加決定時に8ヶ月後のエラペーポリオーンの月 (3月～4月) に上演する作品のシナリオが、どの程度完成したものであるかはもちろん不明であるが、基本的なアイディアは固まっていたと思われる。したがってアリストパネースのアイディアに影響を与えたと思われる事柄は、この夏に生じた二つの重大な事件であったと思われる。一つはシケリアー (シチリア) 島への大艦隊派遣の決定であり、もう一つは遠征の準備期間に生じたヘルメース柱像破壊事件とエレウシースの密儀冒瀆事件であった。

シケリアー遠征は、トゥーキューディデース Thukydides が『歴史』によって伝えるところによれば、以下のようなものであった。この作戦は援軍を送るという口実で、本当の所は島全体を支配することを狙っていた⁵⁾。指揮官としてアルキビアデース Alkibiades、ニーキアース Nikias、ラーマコス Lamakhos の3名が任命され、アルキビアデースが最も積極的に遠征を主張して民会を説得し、遠征に反対するニーキアースの静観主義 *apragmosyne* の立場を非難した (VI.8-16)。そしてそのときアテーナイ市民を捉えた熱狂ぶりを次のように伝えている。

「遠征を実現したいという欲望 *eros* が、すべての市民を捉えた。老年者は、遠征軍はきっと目的地を攻略できるであろう、仮にそれが無理でも、大軍勢が敗退することなどありえないと信じ切っていたし、青壮年者は、遠い国の風景や景観に憧れを抱き、無事に帰還できるものと楽観して *euelpides*⁶⁾ いた。更に一般民衆の兵士たちは、当面の目的としては従軍報酬をもらうこと、その後は、無尽蔵の給与供出源となってくれるはずの新たな支配地域を手に入れることを期待していた。その結果大多数の人々の過剰な熱意がその場を圧倒し、心中では遠征に同意できない者がいたとしても、反対を表明すれば愛国心に欠ける人物と思われるのを恐れて、

沈黙を守っていた。」⁷⁾

公然と反対を述べるのが困難なほど、遠征に対する市民の期待は膨れあがっていた。けれども、すでに夏も半ばになっていよいよシケリアーに向かって艦隊が出港するときには、勝利への希望と、再会できないのではと嘆く気持ちが入り交じっていたのである。

「親しい人に別れを告げるべく、それぞれに友人や親戚や息子の見送りにやって来たアテナイ人は、母国を離れる兵士たちの、これからの航海の長さに思いをはせながら、手に入れるはずのものへの希望 *elpidos* と、再びあえるのだろうかという不安を抱きながら歩いていた。そして、危険を前にしていよいよ見送る者と見送られる者とが別れようとする、まさにその時になって、遠征実施を議決したときよりもはるかに大きな不安が人々の心を襲った。」⁸⁾

それでも人々はこの時の遠征軍の各種の戦力の強大さを目にして自信を取り戻すのであった。アテナイ本隊には重装歩兵4000人、騎兵300人、三段櫓船100隻で、そのほかに同盟国の軍勢が多数参加したのである (VI.31.2)。この遠征軍が世間の耳目を集めた理由を次のように分析している。

「こうして、この遠征軍が世の注目を浴びたゆえんは、攻める相手をはるかに上回る戦力の豊富さもさることながら、むしろその驚くほどの大胆さと外観の華やかさであり、さらには、それまでで最も遠い所まで故国を離れ船を進めたこと、そして、現実から未来へかけるもっとも大きな希望 *megistei elpidi*をもって着手されたことであつた。」⁹⁾

結局の所、この出発に際しては、人々は戦いの結末に対して、たいそう楽観的であり、希望の語が繰り返し使用されているように、まだ大きな希望を抱いていたことが分かる。この雰囲気のアリストパネースの『鳥』の構想になんらかの影響を及ぼしていたかも知れない。しかし、実際に『鳥』が上演される414年の春の時点に至るまで、この遠征の成果は、軍事的にも外交的にもほとんど見るべきものはなかったが、壊滅的敗北までにはまだ時間があつたともいえる。

もう一つは、遠征の準備期間に起きたヘルメース柱像破壊事件とエレウシース密儀の冒瀆事件である。どちらの事件も民主政治の転覆を狙う一派の陰謀ではないかと疑われ、アルキピアデースに嫌疑がかけられた。民衆はこれらの事件に対し、少数支配 *oligarkhia* や独裁政治 *tyrannis* の陰謀と思い、容疑者に対して厳しく当たり、密告者の情報を鵜呑みにして、投獄した者たちを裁判にかけ、残らず処刑にした。アルキピアデースは召喚される途中逃亡し、スパルタへ亡命してしまったので、欠席裁判で死刑を宣告された (VI. 27-28, 60-61)。

劇の冒頭部では、二人の初老のアテナイの男が、訴訟の多さに嫌気がさし（「アテナイ人は一生涯いつでも法廷（の椅子）で歌っている」（40-41）、「（政治や裁判の）煩わしさのない場所」 *topon apragmona* (44)）を求めてアテナイを離れる、という設定になっている。この訴訟は、エレウシース密儀の冒瀆事件に関わる裁判と関係しているかも知れない。

このような時代状況をふまえるとき、この作品にどうしても時代への風刺を読みとりたくなるのも、ある意味で当然といわねばならない。アリストパネースの初期作品『アカルナイの人々』『騎士』（前424年）『平和』（前421年）『雲』（前423年）などには、風刺の対象が非常に明確に見て取れるからである。このような観点をも含めて、『鳥』の解釈をめぐる先行研究に関しては、別稿においてすでに論じている¹⁰⁾ので、ここでは繰り返さない。

最後に、先に引いたヒュポテシスにおいて『鳥』が「カッリストラトスによって……上演された」とある点について説明しておくことにする。カッリストラトスの名はアリストパネースが『ダイタレース』でデビューしたとき以来関連の深い名前である。ヘレニズム時代の古注は「カッリストラトスによって上演された」と伝えるが、前426年の『バビュローニオイ』（断片のみ残存）、前425年『アカルナイの人々』（現存）も同じくカッリストラトスによる上演であると伝えられているのである。このこととアリストパネースが『騎士』『雲』『蜂』『アカルナイの人々』などの作品中で（主としてパラバシスにおいて）初期のキャリアについて言及している部分との整合性が議論の対象になっている。アリストパネースはどのようにして喜劇作家になったのであろうかという興味深い問題と関連するのである。

一つの仮説はこうであろう。観客として喜劇に惹かれた若者が自ら台本を書き始める。その結果できあがった *Daitales* の台本を劇通の何人かの年長の知り合いに見せる（『雲』528 *vδpoi* はこのような人々を指す）。台本を読みその面白さに好印象を持った者たちはアリストパネースに上演するように勧める。しかし台本があれば直ちに上演できるというものではない。大ディオニューシア祭にしろレーナイア *Lenaia* 祭にしろ、アテーナイという都市国家の公的行事であり、喜劇上演に必要なコロスの割り当て（コンテストに参加する5名の喜劇詩人、レーナイアであれば3名の喜劇詩人）を選ぶのはアルコーン（執政官）であったから、まずその審査に通らねばならない。残念ながら、この審査がどのように行われたか、その詳細については分かっていない。大ディオニューシア祭において喜劇の上演が導入されたのが487年頃であるとすれば、アリストパネースのデビューはほぼ60年後になるのであり、突然無名の若い作者がコンテストの参加に必要な要件（その詳細は不明であるが）を満たすことは容易でなかったと思われる。コンテストに参加する詩人はその実績が評価されたことは、著名な悲劇詩人の場合を見ると明らかである。アイスキュロス、ソポクレース、エウリーピデースの三大悲劇詩人はみな長命であったが、その創作期間をおよそ50年と見た場合、それぞれが上演した作品数は73編、123編、92編であり、すべて大ディオニューシア祭の上演としてきわめて単純な計算をするとほぼ18回、31回、23回上演したことになる¹¹⁾。アイスキュロスでおよそ3年に1度、他はほぼ2年に1度参加したことになる。アリストパネースの場合は、前427年のデビューから約40年間の創作活動で作品数は約40編であり、喜劇のコンテストは1人1作品であるから、平均して毎年1回上演していたことになる¹²⁾。アリストパネースのライバルであったエウポリス *Eupolis* も、前429年のデビューから前411年の死までに14から17編の作品を上演しており¹³⁾、ほぼ1年に1作品の割合である。

アリストパネースは自身が実際の上演の準備に携わった経験のないことを『雲』のパラバシスにおいて「わたしはそのとき未婚の少女 *parthenos* であり、子供を産むことは許されなかった」（530行）と比喩的に語っている。さらに続けて「わたしは捨て子にした、すると他のある娘¹⁴⁾が（捨て子を）拾って抱き上げてくれました。それからあなたがた（観客）が寛大にも育て上げ教育してくれました」（531-532行）と述べる。この「他のある娘」がカッリストラトスを指すことは間違いないであろう。彼にはコロスを申請し認められるだけの演劇の経験があったはずである。MacDowell は、俳優であるか、台本作家兼演出家であるか、その両方を

かねていたかと推測する。いずれにせよ、アリストパネースのデビュー作 *Daitales* は、アリストパネースの台本に基づき、カッリストラトスの演出によって上演されたと考えられる。アリストパネースは、上演に至るまでのリハーサルに参加し、台本を舞台化するのに必要な手順、衣装、小道具、コロスの歌とダンスの指導、俳優の演技指導、全体の指揮などを学んだであろう。このような共同作業、すなわちアリストパネースが台本を書き、カッリストラトスがコロスを申請し演出を引き受けるという上演方法は、前427年から前425年まで3年間にわたり続き、少なくとも『ダイタレース』、『バビュローニオイ』、『アカルナイの人々』の3作品が上演されている¹⁵⁾。その間の上演記録には、本来、カッリストラトスの名前が記され、ポイエーテースと呼ばれるのはカッリストラトスであり、賞を受け取るのもカッリストラトスであった。アリストパネースが台本を書いていることは当初は一般の観客には知られていなかった¹⁶⁾（しかし、カッリストラトスに関する伝承はアリストパネースの台本に基づいて上演したとの記録（「カッリストラトスによって」 *dia Kallistratou*）以外には、彼の作品名などは伝わらない。

上記の解題、以下の翻訳と注解において使用した参考文献は下記の通りである。

底本

Nun Dunbar, *Aristophanes Birds*, Oxford 1995

古注

J. W. White, *Aristophanes. The Scholia on the Aves*, Hildesheim/New York 1974 (1915)

参照したテキスト、注釈書等は以下の略号によって示す。

Dover (1968): K. J. Dover, *Aristophanes Clouds*, Oxford 1968

Dover (1972): K. J. Dover, *Aristophanic Comedy*, London 1972

Dover (1993): K. J. Dover, *Aristophanes Frogs*, Oxford 1993

Halliwell (1997): S. Halliwell, *Aristophanes Birds, Lysistrata, Assembly-Women, Wealth. A New Verse Translation with Introduction and Notes*, Oxford, 1997

Henderson (2000): J. Henderson, *Aristophanes Birds, Lysistrata, Women At The Thesmophoria*, Loeb Classical Library, 2000

Kiso (1984): A. Kiso, *The Lost Soohocles*, Vantage Press, 1984

LGNP: *A Lexicon of Greek Personal Names*. Vol. II Attica edited by M. J. Osborne and S. G. Byrne, Oxford, 1994

MacDowell (1971): D. M. MacDowell, *Aristophanes Wasps*, Oxford 1971

MacDowell (1993): D. M. MacDowell, Foreign birth and Athenian citizenship in Aristophanes; in A. H. Sommerstein, S. Halliwell, J. Henderson and B. Zimmermann (eds.) *Tragedy, Comedy and the Polis*, Bari, 1993, pp. 359-371

Madge and Burn (1994): S. Madge and H. Burn, *Crows & Jays*, London, 1999(1994)

Olson (2002): S. D. Olson, *Aristophanes Acharnians*, Oxford, 2002

Parker (1983): Parker, *Miasma*, Oxford 1983

Rogers (1930): B. B. Rogers, *The Birds of Aristophanes*, London 1930 (1906)

Sommerstein (1987): A. H. Sommerstein, *Aristophanes Birds*, Warminster 1987

Storrey (2003): I. C. Storey, *Eupolis. Poet of Old Comedy*, Oxford, 2003

- Thompson (1936): D. W. Thompson, *A Glossary Of Greek Birds*, Oxford, 1936(1895)
Ussher ((1973): *Aristophanes Ecclesiazusae*, Oxford, 1973
West (1978): , M. L. West, *Hesiod Works and Days*, Oxford 1978
久保田 (1980): 久保田忠利「エウリピデスの「テレポス」-断片による復元と構成上の問題点の検討」,『福井工業高等専門学校研究紀要 (人文・社会科学)』第14号, 1980, pp. 39-62
久保田 (1999): 久保田忠利「喜劇と危機の時代-アリストパネス『鳥』の解釈をめぐる」,『古代ギリシア・ラテン文学に現れた危機の思想の研究』平成8年度~平成10年度科学研究費補助金 (基盤研究 B(2)) 研究成果報告書, 研究代表者中務哲郎, 平成11年, pp. 16-31
ベリンズ (1996): クリストファー・M・ベリンズ監修, 山岸哲日本語版監修『世界鳥類事典』同朋舎出版, 1996
ローレンツ (1975): コンラート・ローレンツ, 日高敏隆訳『ソロモンの指輪』早川書房, 1975

注

- 1) アメイプシアースの『コーマスタイ』については, 断片がなく他に言及する資料もない。『コーマスタイ』の断片の作者としてはプリューニコスが知られている。したがって, この年の大ディオニューシア祭優勝作品である『コーマスタイ』はプリューニコスが書いたものをアメイプシアースが演出したのではないかとの説がある。cf. Sommerstein (1987), p. 1, n. 1. アメイプシアース説を擁護するのは Rogers, (1930) p. vii-viii.
- 2) 写本では Khabrias とある。
- 3) 大ディオニューシア祭は現在の3月から4月にかけての時期に行われる。ディオニューソス神の祭礼で, アテーナイの国家的行事である。イヴェントとしては部族対抗のディーチュランボス (合唱抒情詩) のコンテスト, 悲劇および喜劇のコンテストが催された。喜劇は5人の作者が各自1編の作品を上演するコンテストである。この祭典は国家的行事であるため, その責任者はアルコーン・エポーニュモスであった。
- 4) 当時のアテーナイの暦では新年が始まるのは夏至後の最初の新月からであったから, 最初の月ヘカトンバイオン Hekatonbaion はほぼ現在の7月から8月に当たる。アリストテレス『アテーナイ人の国制』56によれば, アルコーン・エポーニュモスの最初の仕事の一つに大ディオニューシア祭の参加詩人の選定が上げられている。しかし, 選定に関する具体的な手順は何も分らない。
- 5) 「遠征の真実の動機はシケリア全島を支配下におくことにあった」『歴史』VI.6.1.以下引用は, トゥキディデス (城江良和訳)『歴史2』京都大学学術出版局, 2003年による。
- 6) このエウエルピデス euelpides に『鳥』の登場人物の一人の名前エウエルピデース Euelpides との関連を見ようとする説もある。Sommerstein (1987), p. 4, n. 16.
- 7) 『歴史』VI 24.3.
- 8) 『歴史』VI 30.2.
- 9) 『歴史』VI. 31. 6.
- 10) 久保田 (1999) pp. 17-31 参照。
- 11) 各詩人の作品数は伝承により異なる。作品数の中にどれだけのサテュロス劇がふくまれているかは正確にはわからない。例えば, エウリーピデースの場合, 92編中8編がサテュロス劇と伝えられている。大ディオニューシア祭では1人の詩人は3編の悲劇と1編のサテュロス劇をセットにして上演することになっていたから, エウリーピデースは8回大ディオニューシア祭に参加し40編上演した計算になる。残りの52編はどうなるのか。エウリーピデースの場合は, 前438年の『アルケースティス』のようにサテュロス劇の代用と考えられる作品があるので, さらに13回大ディオニューシア祭で上演したとすれば勘定が合う。前5世紀のレーナイア祭では2名の悲劇詩

人がそれぞれ2編の悲劇でコンテストに参加していたが、エウリーピデースがレーナイア祭に何度参加したかは全く分からない。

12) Olson も同様の計算をしている。Olson (2002) p. xxix.

13) エウポリスのキャリアについては、Storey (2003), pp. 54-62 参照。

14) *παῖς δ' ἑτέρα τις* とあり、直訳すれば「他のある女の子」であるが、*παῖς* は既婚の少女を意味することがあるので、ここでもその意味であろう。おそらくアリストパネスよりも年長のカッリストラトスを意味する比喩としては、アリストパネスと同じ「未婚の少女」では適切とは言えないであろう。Sommerstein, *Clouds (The Comedies of Aristophanes: vol. 3)* p. 188, n. 531 参照。

15) 426年の Lenaia 祭でも共同作業による上演が行われたと推測されているが、この時の共同相手がカッリストラトスであるか、あるいはピローニデース Philonides であるかは意見が分かれている。

16) 『蜂』「公然とではなく秘かに他の詩人たちの助手を務めながら、……沢山の喜劇的なもの（言葉？）を注ぎ込むために他の人たちの胃袋のなかに入りこんだが、その後はもう公然と自分自身のために危険を冒し、他の人のムーサたちではなく自分のムーサたちの轡を手綱で操った」。

『鳥』1-53行翻訳と注解

エウエルピデース¹⁾（自分の手に持つコクマルガラスに向かって）²⁾お前の指図はまっすぐか、あの木が見える方か？

ペイセタイロス³⁾（自分のズキンガラスに向かって）ぶっとばすぞ⁴⁾。（エウエルピデースに向かって）このカラスはまた「引き返せ」と鳴いている。

エウエルピデース おお、根性悪め⁵⁾、なぜわたしらがあちらこちらとさまようことになるのだ？

この道を行ったり来たりしているうちに、このまま二人ともくたばってしまう。

ペイセタイロス ズキンガラス⁶⁾の言いなりになって、1000スタディオン⁷⁾

以上の道のりを歩き回るとはわたしも哀れなものだ！

エウエルピデース コクマルガラス⁸⁾の言いなりになって、両足の爪をすっかりだめにするとはわたしもついていない！

ペイセタイロス だが、わたしらがどこの土地にいるのか、わたしにはもう分からない。

君はそこから祖国を見つけられそうか、どうだ？

10

エウエルピデース ゼウスに誓って、ここからはエクセケステイデースでも無理だ⁹⁾。

ペイセタイロス オイモイ¹⁰⁾。

エウエルピデース おお哀れな男よ、君は今のその道を行け¹¹⁾。

ペイセタイロス¹²⁾ 本当にわたしら二人にひどいことをしたものだ、あの鳥市場¹³⁾の男、

露天¹⁴⁾で鳥を売るあの気の狂っているピロクラテース¹⁵⁾は、

この鳥どもがわたしらにあのテーレウス¹⁶⁾のことを教えるといったのだから

[鳥たちから鳥に変身してヤツガシラになった男のことを、]¹⁷⁾

そしてタツレイデースの息子¹⁸⁾、このコクマルガラスを

1 オボロスで売りつけた、そちらは3オロボスでだ¹⁹⁾。

この2羽はやはり噛みつくこと以外は知らなかった。

(コクマルガラスに向かって²⁰⁾) 今もお前は欠伸をしているがなぜだ? この岩場の下へ²¹⁾

まだどこか

20

わたしらを連れて行くところがあるのか? ここには道らしきものはないのだから。

エウエルピデース ゼウスにかけて、少なくともここは全くの行き止まりだ。

ペイセタイロス このズキンガラスが道のことでなにか言っている²²⁾。

ゼウスにかけて今回の鳴き方はさっきと同じことを告げているのではない。

エウエルピデース 道のことで実際何と言っているのです?

ペイセタイロス

わたしの指に

噛みつきながら言うことといえば、食いちぎるということだけだ²³⁾。

エウエルピデース (観客に向かって) オオガラスのところへ行く²⁴⁾ 必要があり

すっかりその準備が整っているというのに、わたしらを道を

見つけられないとはひどいことではないか。

話をお聞きのここにいる皆様方、わたしらを

30

サカース²⁵⁾とは正反対の病気で苦しんでいるのです。

彼の場合は市民でないのに無理に市民の一員になろうとしているが、

わたしらの場合は部族の点でも家柄の点でも²⁶⁾ 尊敬される身で、

市民として市民にたちまじり、誰も追ひ払うものがないのに

祖国から飛び立ったのですーこの両足で²⁷⁾、

わたしらはあのポリスそのものを憎んでいるのではない

今あるがままでは大きく繁栄したポリスでないからとか

財産を罰金に支払えるようにすべての人々に開かれていないからとかではない²⁸⁾。

セミどもは一ヶ月か二ヶ月の間

イチジクの小枝にとまってかまびすしく歌うのに対し²⁹⁾、アテーナイ人たちは一生涯

40

いつでも訴訟の場でかまびすしく歌っている³⁰⁾。

それゆえわたしらはこの踏み分け道を踏み歩いているのである。

アシ製の籠、土鍋、ギンバイカの枝を携え³¹⁾、

煩わしさのない場所³²⁾、そこでなら住み着いて日々の暮らしのできる場所を

わたしらは探し求めてさまよい歩いている。

わたしらの旅はヤツガシラになったあのテーレウスのもとへ行くこと、

彼から聞きたいと願っているのは、彼が飛んでいったことのあるところで

そういったポリスを知っているかどうかなのだ。

ペイセタイロス おい。

エウエルピデース なんだ?

ペイセタイロス ズキンガラスがたった今わたしに

上を向いて何か教えようとしている。

わたしに何か指し示すかのように上を向いて大きく口を開けている。

このあたりに鳥たちがいない訳がない。

わたしが騒々しい音を立てれば、すぐにも分かるだろう。

注

- 1) 「楽観的」を意味する語 *euelpis* から形成された名前であろう。以下のセリフ割り振りは底本に従っている。本劇のセリフの割り振りは編者によって相当異なる。その異同の詳細は大変煩雑であるためいちいち記さず、別表の対照表によって示す。セリフの割り振りが混乱する原因は、話者が名前の省略形で記される場合もあるが、ダッシュやコロンのような記号でセリフの始まりや終わり示すだけの場合があり、話者が3人になると話者の特定はコンテキストによって決定するほかなくなるからである（喜劇における話者の決定の問題については Dover (1972) pp. 6-10 参照）。本劇の場合、644行以下ではじめて2人のアテーナイ人は自分の名前を名乗る。このように主人公の名前が明かされるのが遅くなることは必ずしも珍しいことではない。『アカルナイの人々』では主人公ディカイオポリスの名前は406行、『騎士』ではソーセージ売りの本名アゴラクリトスは劇末の1257行で明かされる。
- 2) 1行目への古注には「コクマルガラスを持つ者が語る……」とある。
- 3) この登場人物の名前は、写本は「ペイセタイロス *Peisthetairos*」であるが、これを採用するものは少ない (Rogers)。従来は「ペイテタイロス *Peithetairos*」あるいは「ピステタイロス *Pisthetairos*」(Meineke, Schoeder, Coulon) とされることが多かったが、底本は *Peisetairos* (Dobree の校訂) を採用している。写本の *Peisthetairos* が採用されない理由は、この形が文法的に説明できないからである（人名にも意味があり、例えば英雄ヘーラクレース *Herakles* は女神 *Hera* (ヘーラー) と *kleos* (名声) から形成されていると考える)。この場合、*peitho* (説得する) のアオリスト受動相 *epeisthen* との関連が考えられるが、人名は一般的に受動態からは形成されない (Dunbar, p.128-9)。ピステタイロス *Pisthetairos* は *pisteo* (信頼する) と *hetairos* (仲間) と考えられ、「仲間を信頼する者」の意味になる。ペイテタイロスはペイトー *peitho* の現在形とヘタイロス *hetairos* で「仲間を説得する者」を意味すると考えられる。ペイセタイロスは *peitho* のアオリスト能動相 *epeisa* (「説得した」) と *hetairos* で、「仲間を説得した者」を意味する。*Pisthetairos* は前4世紀のアテーナイ人の名前として実在するが、他の二つは実在しない。類似の形成法による名前、例えば *Peithandros* あるいは *Peisandros* はいずれも実在する。本劇の主人公となるこの人物は、鳥たちを説得し鳥のポリスを建設させるのであるから、後者の二つのいずれかが主人公の性格をよく表すふさわしい名前と考えられる。Dunbar は、アリストパネースが自分の劇に登場させからかっている *Peisandros* (『バビュローニオイ』断片84, 『平和』395, 『リュースストラテ』490-1, 本劇1556) に触発されて *Peisetairos* としたと推測している (Dunbar, p. 129)。
- 4) 直訳すると「お前が破裂すればよいのに」の意。1257行にもあるように、ここでは悪態の言葉である。誰にあるいは何に向かって悪態をついているのか。(1)エウエルピデースの持つコクマルガラス、(2)自分の持つズキンガラス、(3)エウエルピデース、(4)特定の相手はない、と四つの場合が考えられる。Dunbar はコクマルガラスに対してと解釈している。Sommerstein (1987) はズキンガラス説であり（話者は1行目ペイセタイロス、2行目エウエルピデースに割り振る）、Rogers (1930) は自分のフラストレーションを表出するのが目的であり特定の相手を想定していないとする。1行目でコクマルガラスはまっすぐ行くように指示しているのにたいし、2行目では、次にあるようにズキンガラスは「引き返す」ように指示する。2羽のカラスの指示が一致しないために2人は惑わされ、混乱し、さまよい、疲労してきた。1行目のコク

マルガラスの指示に従って2人がその方向へ動き出そうとすると、2行目でズキンガラスはその反対の方向へ飛ぼうとする。このような状況からすると、ペイセタイロスは自分の持つズキンガラスに向かってフラストレーションをぶつけたとするのが自然であろう。Dunbarのように自分のいらだちを相手の持つコクマルガラスにぶつけるとするのは無理であろう。むしろ自分の感情を吐き出すことに主眼があるとする Rogers の指摘が正しいであろうが、その言葉を吐く直接の切っ掛けは自分の持つズキンガラスの動きによるのであるから、言葉自体はズキンガラスに向かって投げつけられるのであろう。

- 5) テキストは *πονηρός*。「質が劣っている、貧弱である」ことを意味する (Dover (1993) p.12 n.4: '*πονηρός* in particular can mean 'of poor quality' in respect of whatever function is under discussion.') ので、实际的に「役に立たない」ことから、道徳的な観点から見て「悪い、価値のない」を意味する。しかし、呼びかけの語としては、憐れみながら馬鹿にする感情の表現にも用いられる (MacDowell (1971) ad 214: 'a mixture of sympathy and contempt'). この場面においても、この語がペイセタイロスに向けられているのか、それともコクマルガラスに向けられているのかによって、解釈は分かれる。Dunbar はペイセタイロスに向けてであり、「困った奴だな you poor fool」と注解している (ad 3). Henderson (2000) は「知ったかぶりをする奴だな you wiseacre」と訳しており、いずれとも決定しがたい。Sommerstein (1987), Rojers (1930) も訳文からは判定し難い。Halliwell (1997) は「For crying out loud! なんてことだ」としており、これまたどちらとも解しうる。注4に記したように、この場面では、2人がそれぞれのガラスの指図に振り回されているところにポイントとがあると思われる。したがって、エウエルピデースとペイセタイロスはガラスの異なる指示によって反対方向を向いている。このことは、5～6行のペイセタイロスのセリフ、7～8行のエウエルピデースのセリフが自分の持つガラスに向けて語られていることから明らかであるように思われる。
- 6) ギリシア語では *κορώνη* コローネー。学名 *Corvus corone sardonius*。これはハシボソガラス (学名 *Corvus corone*) の亜種である。Dunbar のズキンガラス hooded crow とする説 (p. 130) に従うが、島崎三郎訳『動物誌』617b (岩波文庫) ではハシボソガラスとする。大きさは Madge and Burn (1994) によれば全長48-52cm, 翼長302-330mm, ベリンズ (1996) によるとそれぞれ約50cm, 32-37cm で、ワタリガラス (本劇での訳はオオガラス) よりも小さく、コクマルガラスよりは大きい。ヘーシオドスは日常生活のタブーを列挙しながら「家を建てる時に (屋根の) 表面を削らずに放置してはいけない、喧しいズキンガラスが (屋根の) 上に止まりカーカーと鳴きたてないように。」と述べている (『仕事と日』746-7)。アリストテレースはふだん町に住んでいるガラスとしてオオガラス (コラクス *korax*) とハシボソガラス (ズキンガラス) (コローネー *korone*) を挙げ、「これらはいつでも見られるし、住んでいる場所を変えず、冬ごもりもしない」と記している (『動物誌』617b)。ヘーシオドスは、この箇所ではズキンガラスが屋根に止まって鳴き声をあげることを避けるべき不吉な事柄の一つに挙げているが、それが何の前兆であるのかは述べていない。West はそれが「なんらかの個人的な不幸を予兆するにちがいない」として、現代ギリシアではその家に死人がでることの予兆だと信じられているとの事例を引いている。アイソーポズによると、女神アテーナーはズキンガラスを憎みこのガラスの示す前兆を誰も信じないようにしたとの話を伝える (中務哲郎訳『イソップ寓話集』125「嘴細鳥と鳥」(中務訳の「嘴細鳥」はズキンガラス、「鳥」はオオガラスのことである), 127「嘴細鳥と犬」, 岩波文庫)。アリストテレースはフクロウとズキンガラスが敵対関係にあることの理由を次のように記している。「フクロウは昼は目がよく見えないので、ガラス (ズキンガラスのこと) はフクロウの卵を盗んで食べるし、フクロウは夜にガラスの卵を食べるからで、ガラスは昼、フクロウは夜が優勢なのである」(島崎訳『動物誌』609a)。ズキンガラスの鳴き声が予告するのは悪天候であることについては West (1978), p. 341, Thompson (1936) *korone* の項参照。一般にガラスが大変長命であると考えられていたことについての諺

風の言い回しは609行注を参照。

- 7) スタディオンは長さの単位。アッティカでは1スタディオンは100オルギュイア *orgyia* で、約177.6mである。古代ギリシアの度量衡は地域により異なっており、例えば、オリュンピアでは192.27m、デルポイでは177.5mである。『雲』では100スタディオンが長い距離のまとまりとして比喩的に使用されている。「わたしがギリシア人のなかで100スタディオン離れて最も優れていると……」(430行)。
- 8) ギリシア語で *κολλοῖος* コロイオス、学名 *Corvus monedula* で和名はニシコクマルガラスであるが、以下本劇では *Corvus dauuricus* の和名コクマルガラスを使用する。大きさは Madge and Burn (1994) によれば体長34-39cm、翼長215-251mm、ベリンズ (1996) によるとそれぞれ33cm、24cm(「ニシコクマルガラス」の項)でカラス類のなかで最も小型であり、ハトほどの大きさである。小型であることは、『イーリアス』の比喩のなかで、タカに追われる小型の鳥としてムクドリ *psar* (ホシムクドリ *Sturnus vulgaris*、アリストテレスでは *psaros*) とならべて言及されていることから明確に意識されていることが分かる(16.583; 16.755)。この比喩では、コクマルガラスが大変群居性に富むこと、またコクマルガラスがホシムクドリと一緒に餌場に群れていることもよく観察されていると思われる。カラス類のなかでは全身が黒色でないことが特色であり、後頸から頸側、胸、腹が灰黒色のものと、灰白色ものがある。アイソーポスの寓話129「黒丸鳥と鳩」(岩波文庫版、直訳すれば「コクマルガラスとドバト」)では、このコクマルガラスの大きさと色とが話の背景にあると思われる。飼育されているドバトの餌がよいのを見て欲しくなったコクマルガラスは自分を白くして同じ餌にありつく。黙っているうちはドバトだと思われていたのに鳴き声を発したとたんに正体が露見し追い払われるのである。話の主人公にオオガラスやハシボソガラスではなくコクマルガラスが選ばれている要因は、明らかに、大きさがハトと変わらないことと全身の色が真っ黒でないことであり、この二つがコクマルガラスのたくらみの動機づけや、鳴き声によって正体が露見する(変装は見破られない)というモチーフにリアリティを与えていると思われる。テオプラストスによると、家で飼われているコクマルガラスは、青銅の小楯を嘴にくわえ、小さな梯子を上ってゆくという(森進一訳『人さまさま』岩波文庫、「21虚栄」)。森訳では「九官鳥」とあるが、原語は *κολλοῖος* でコクマルガラスのこと。コクマルガラスのみならずズキンガラスもワタリガラスも人語をまねるのが巧みであることについてはローレンツ (1975) を参照)。アリストパネス『蜂』129-30行では梯子をぴょんぴょん登るさまへの言及がある。おそらく前5世紀においてもすでにペットとして飼われることがあったと思われる。ローレンツ (1975) はコクマルガラスがいかに人間になつくかを報告している。人間に捉えられたコクマルガラスが逃げ出す話がアイソーポスの寓話131「逃げた黒丸鳥」(岩波文庫版)にあるが、この話でもペットにすることが背景にあると思われる。アマ製の糸をコクマルガラスの足にくくりつけ、子供に与えたとあるが、アマ製の糸は釣り糸に使用される(『イーリアス』16.408「アマ製の釣り糸と青銅の釣り針で」)もので細く丈夫なものであろう。本劇においても、アマ製の糸で足を結わえられたコクマルガラスとズキンガラスを手にして登場していると思われる。
- 9) Exekestides は前5世紀のアテーナイ市民。本劇では他に764-5行、1527行でアリストパネスのからかいの対象とされている。本劇と同時に上演されたプリューニコスの『モノトロポス *Monotropos* (一人暮らし)』では、リュケアース、テーレアース、ペイサンドロスの三人とともに「大猿たち」としてひとくくりにされ、非ギリシア人であるとして嘲笑の対象にされたようであるが、断片のテキストは壊れている(断片21)。本劇での言及と古注からするとエクセケステイデースは、バルバロス(非ギリシア人に対する蔑称)で奴隷の血筋の政治家であり、奴隷の供給地カーリア(小アジア)からアテーナイにたどりつき市民にもなったと揶揄されているのである。ここでは、遠くカーリアから来た彼でさえもここからではアテーナイにたどり着くことはできないという冗談と思われる。アリストパネスが市民権の疑わしい人物を揶揄す

- る事例については、MacDowell (1993) の議論を参照。エクセースティデースという名前は、413年頃の墓碑銘に見られ、由緒ある家系に属する (Dunbar ad loc.).
- 10) οἶμοι は苦痛、恐れ、哀れみ、怒り、嘆き、驚きなどの感情を表出する感嘆詞。古注によればペイセタイロスがなにかにつまずいて発した言葉。
- 11) 「その道」とは、ペイセタイロスがなにかにつまずき「オイモイ」と嘆くことになった道のこと。自分に不幸が及ばないように、不幸な目にあった人間を遠ざけておこうとするのは当時の一般的態度であった。エウリーピデース『ヒケティデス』には、結婚の結びつきに関して恵まれた境遇の者を身内に迎えるべきだとして、「汚れてもおらず悪を犯していない者でも、汚れた者の受けるわざわざいのために破滅するものだ」(227-8行。橋本隆夫訳、岩波版『ギリシア悲劇全集6』)とある。古典期ギリシアにおいて、汚れ(例えば殺人による血の汚れ)が接触した人間にうつるとする考えは広範囲に見られる。不幸もまたそのように接触伝染すると考えられたとしても不思議ではない。古代ギリシアの汚れと清めについては R. Parker, (1983) 参照。上記の『ヒケティデス』の箇所に関しては同書 p. 219。
- 12) Dunbar は13-22a 行をペイセタイロスに割り当て、27-48行をエウエルピデースに割り当てることでバランスをとっている。Henderson もその立場である。Sommerstein (1987) は両方ともペイセタイロスに割り当てることによってペイセタイロスの主導的役割強めている。
- 13) アゴラー(広場兼市場)には肉、魚、野菜、果物を商う店の他に鳥を食料として売る一角があったのであろう。
- 14) πινακοπώλης ピナゴポーレスは、この箇所にのみ見られる語である。πίναξ ピナクスは板のことで、羽をむしった小さな鳥を板の上に並べて売る商人のこのようなことである。
- 15) Philokrates は、1076-83行では「小スズメのピロクラテース」とあだ名を付けられており、鳥を虐待した罪でコロスの鳥たちから賞金をかけられる男。「気の狂っている」は μελαγχολῶν の訳。「黒い胆汁をしている」の意味であるが、医学的用語としてではなく、一般的な用法で「気の狂っている」を意味する。『エックレーシアズサイ』251行の用例では παραφρονεῖν「逆上する、常軌を逸する」よりも異常さがはなはだしいと思われる。Ussher (1973) ad 251 参照。
- 16) Tereus はトラケー(トラキア)王。テーレウスがヤツガシラ Epops に変身した経緯は次のように伝えられている。アテーナイ人の王パンディーオーンの娘プロクネーを妻とし、一子イテュスをえる。妻が妹のピロメラーに会いたがったため、テーレウスがアテーナイに行き、ピロメラーを連れ帰ることにする。しかし王は途中で彼女を犯し、口外されるのを恐れて彼女の舌を切り取った。だが妹は強姦されたさまを布に織って姉に知らせた。姉妹は復讐のためにイテュスを殺してその肉を料理し、テーレウスに食べさせた。食後に姉妹は料理の中身を明かし逃亡した。王に追われ捕まりそうになった姉妹を神が憐れみ、プロクネーをウグイスに、ピロメラーをツバメに、テーレウスをヤツガシラに変身させた。ソポクレースがこの伝承を悲劇にしたことが知られている。本劇100-101行で「このようにソポクレースが悲劇の中でわたしテーレウスを辱めた」とあるので、上演年代はソポクレースの悲劇が『鳥』よりも早いことは確かである(物語の梗概はアポロドーロス『ビブリオテーケー(ギリシア神話)』およびは木曾明子訳『テーレス』(岩波版『ギリシア悲劇全集11』)参照。上演年代や『鳥』との関係、ソポクレース『テーレウス』の再構成については Kiso (1984) pp. 51-86 参照)。両作品の上演が比較的接近していると推測されることもあるが、ある喜劇作品の中に悲劇作品への言及あるいはパロディがあることから、直ちに両作品の上演年代が接近しているとは必ずしも言えない。アリストパネースはエウリーピデース『テーレポス』(前438年上演)のある場面を二度パロディ化しているが、一度は前425年『アカルナイの人々』で13年後、二度目は前411年『テスモポリアズサイ』で27年ほどの隔たりがある。『テーレポス』とアリストパネースのこの両作品の関係については、久保田忠利「エウリピデスの「テーレポス」断片による復元と構成上の問題点の検討」(『福井工業高等専門学校研究紀要(人文・社会科学)』第14号, 1980, pp. 39-62) 参照。

- 17) Dunbar はこの行を削除する立場を支持している。テーレウスの説明のために書き込まれた注解がセリフに紛れ込んだと見なされている。16行目末は ἐκ τῶν ὀρνέων とあり、13行目末の οὐκ τῶν ὀρνέων とほぼ同じ語句であることも、疑われる根拠となっている。また、現在のテキストのままでは行末の語句（「鳥たちから」あるいは「鳥市場から」）をどのような意味に解釈すればよいか説明が付かない。Sommerstein は語末の語句に伝承不全の記号を付している。Henderson は、Koechly の提案する ἀνθρωπός ποτ' ὦν を採用し、「かつて人間でありながら鳥になったところのヤツガシラを」と読む。削除しないためにはテキストの校訂が必要である。
- 18) Tharraleides という名前は前410年のアテナイの戦死者リストを記した碑文で確証されているが、LGPN には3名あがっている。「タツレレイデースの息子」とコクマルガラスとどのような関係にあるのかは不明。古注によると、タツレレイデースの息子はアソーポドーロスといい、小柄で騒々しいお喋りな男であることから古喜劇詩人テーレクレイデース Telekleides (前5世紀) にコクマルガラスとあだ名されたという。しかし、タツレレイデース自身が小柄であるとする古注もあり、これに従えば、コクマルガラスの父親はタツレレイデースだという冗談になる。
- 19) 1 オボロス obolos は最小の貨幣単位で、6 オボロスで1 ドラクマ drakhma になる。『蜂』52行には奴隷同士の会話の中で、夢の解釈を上手にする者には2 オボロス支払って雇う、とある。『蛙』では、冥界の渡し守カローンに支払う船賃は2 オボロス。410年に διωβελία (生活困窮者に対し毎日生活費を支給する制度) が行われるようになったときその金額は2 オボロスであったといわれる (アリストテレス『アテナイ人の国制』28.3. Dover (1993) ad 141 参照)。裁判人の日当は3 オボロスである (『蜂』609, 690)。民会の出席手当も3 オボロスであった (民会の出席手当の変遷については Ussher (1973) ad 292b 参照)。3 オボロスで購入できる食料品は小麦1 ヘクテウス (8 コイニクスに相当) であり、成人男子が1日に消費する小麦の量は1 コイニクスといわれるので、3 オボロスで1日8人分が購入できることになる。コクマルガラスが1 オボロスで、ズキンガラスが3 オボロスという値段がリーズナブルなものか、高いのかは判断が難しいが、ペイセタイロスがわざわざ値段に言及するのは他の食用の鳥の値段に比べれば高いからであろう。
- 20) ペイセタイロスが自分の持つズキンガラスに向かって語りかけていると解釈することも可能であろう。しかし、23行でペイセタイロスはズキンガラスの様子に注意を向けているので、コクマルガラスとするのがよいであろう。Dunbar, Sommerstein (1987), Henderson (2000), Halliwell (1997) はみなコクマルガラス説。
- 21) 2人はパロドスからオルケーストラ (コロスの歌い踊る円形の場所) に入り、自分の持つカラスの動きに合わせてうろうろしているが、この時までにはオルケーストラとスケナー (楽屋兼背景となる建物) の間にある舞台の上に上がっており (オルケーストラの平面から数段の階段で舞台の上に昇れた)、その端に立っている (Dunbar)。あるいは舞台の一方の端のところに来ている (Sommerstein (1987))。あたかも崖の縁にいるかのような演技のできる場所にいるということ。
- 22) この行はアクセントの付け方と、分の区切り方により意味が異なる。Dunbar は訳文のように平叙文と解釈する。Sommerstein (1987) は「なんだって? このズキンガラスは道のことでなにか言っているのだろうか。」と読んでいるが、注では他の解釈の可能性を列挙している。Rogers (1930) は「だがそのズキンガラスは道のことで何をいっているのだろうか」と解している。
- 23) もちろんペイセタイロスはズキンガラスに指を噛みつかれている。23-4行で彼は自分の持つズキンガラスの鳴き方からなにか新たな情報を期待したが、19行で「噛みつく以外知らない」と言ったとおりに、ここでも期待は無に帰し、噛みつかれるだけであったということ。
- 24) ἐς χόρακας は「オオガラスに喰われろ」「くたばれ」の意味で罵倒の決まり文句として用い

られる。したがって ἐς κόρακας ἐλθεῖν「オオガラスのところへ行く」は「カラスに喰われに行く」「くたばりに行く」の意味を含むことになり、掛詞になっている。オオガラス *Corvus corax* の和名はワタリガラスであるが、ここでは島崎三郎訳『動物誌』617b にしたがってオオガラスとする。オオガラスはカラス中最大で、Madge and Burn (1994) によれば体長58-69cm, 翼長380-473mm, ベリンズ (1996) によればそれぞれ61-69cm, 約49cm, 翼開長約1m あって、ワシなどの猛禽類に匹敵する大きさである。小禽類, 小獣類, 魚類, 鳥の卵, 魚卵などを好むが、特に腐肉が好物であって、大きな鳥獣の死体に群がり、頑丈な嘴で肉を引き裂くことが知られている。アイスキュロス『アガメムノーン』では夫を殺害したクリュタイメーストラーについて「忌まわしいオオガラスのように死体の上に立ちはだかり」(1472-3) とある。ここには死体に群がってくる大きなオオガラスの不吉なイメージが鮮明な比喻として用いられている。アイスキュロス『ヒケティデス』751では、アイギュプトスの息子たちについて「かれらは、……オオガラスのように、祭壇を少しも恐れ敬うことがなく」(751-2) とある。アイソポス324「病気の鳥」(岩波文庫版。この「鳥」はオオガラスのこと) では重病のオオガラスに向かって母ガラスが「息子よ、神々のうちでどなたがお前を憐れむだろうか。お前に(祭壇の)肉を盗まれなかった神はどなただろう?」と語る。オオガラスが祭壇で焼かれ供えられた肉を荒らすことも一般的であったと思われる。オオガラスの攻撃性についてはアリストテレース『動物誌』に「オオガラスも牡牛やロバに飛びかかって攻撃し、目をつつくために、彼らと敵対関係にある」(609b5, 島崎訳) とある。ἐς κόρακας が罵倒の常套句になった理由としては、腐肉を好むオオガラスの食性によるところが大きいであろうが、ギリシア人にとってなじみの鳥であると同時に、祭壇の略奪や家畜を襲う攻撃性などにより恐ろしい忌むべき種族のカラスであると意識されていたことによるであろう。オオガラスに関する古代の言及については Thompson (1963) *κόραξ* の項参照。

- 25) サカイ Sakai 人はスキュタイ系遊牧民族のひとつであるが、ペルシア人にとってはスキュタイ人一般を指す言葉であった(ヘーロドトス『歴史』VII, 64)。カスピ海東部に居住していたと思われるが、各地に侵入しており、前1世紀にはインダス川下流東部地域にも居住していた。単数形であるサカース Sakas が固有名詞のように使用されている例は、クセノポン『スキュロスの教育』に見られる(メーディア王アステアゲースの酌人の名前 (I. 3. 8-10))。本劇のこの箇所への古注は、サカースは悲劇詩人アkestールのことで、外国人であることからそのような渾名が付いたのであり、サカイ人 Sakes はトラケー (トラキア) の部族であるとしている。『蜂』1221行では「アkestールの息子」への言及があるが、喜劇詩人メタゲネース Metagenes (前5~4世紀) には、「誰が市民なのであろうか、ミュージア人でありカリアースの庶子であるサカースは別にして」との科白がみられる(断片14)。エウエルピデースは、自分たちは非の打ち所のないアテーナイ市民であるのに他のポリスに移り住もうとしているのであり、なんとかしてアテーナイの市民権を手に入れようとしているアkestールとは正反対だと、お決まりの当てこすりをしているのである。
- 26) 部族は φυλή ピューレーの訳。前508/507年のクレステネース Kleisthens の改革によってアッティカは10の部族に人為的に分けられた(血縁関係による集団ではない)。アテーナイの10名の指揮官 στρατηγός strategos, 500名の評議会 βουλή boule, 6000名の裁判人などさまざまな公務に携わる人々の選出母体となる。家柄は γένος ゲノスの訳。ゲノスの実体については議論があるが、世襲の祭祀職を司る血筋のものであろう。
- 27) ἀνεπτόμεσθ' ἐκ τῆς πατρίδος ἀμφοῖν ποδοῖν, ギリシア語のテキストでは「わたしたちは飛び立った ἀνεπτόμεσθ'」が行頭にあり、「足で ποδοῖν」が行末にある。行頭におかれた動詞は鳥が飛翔する動作を表すので、行末に予想される語は「翼」であるが、エウエルピデースはその予想を裏切り自分の両足を指し示しながら「足で」と語る。パラ・プロスキアン para prosdokian (期待に反して) と呼ばれる笑いの技法である。

- 28) アテーナイ人はアテーナイがすべての人々に開かれていることを誇っていた。ペリクレスは追悼演説においてアテーナイの軍事訓練に関して、「吾々はポリスを万人共通のものとして公開しており、いかなる時にも外国人排斥によって何人かが知ったり見たりするのを妨げはしない」と語っている（トゥーキューディデース『歴史』2.39. 藤縄謙三訳, 京都大学学術出版会）。エウエルピデースは、アテーナイがすべての人に共通に開かれていることは裁判に関しても同様であり、やって来た人は誰でも訴えられて罰金を支払えと、「すべての人に共通のポリス」のイメージをパロディ化している。
- 29) 「夏の間歌っているセミ」というイメージがギリシア人にとって伝統的なものであったことは、ヘシオドス『仕事と日』582行以下に「騒がしい蟬が樹にとまって休みなく、その羽の下から朗々たる歌を、四方に撒き散らす凌ぎがたい夏の日々」（松平千秋訳, 岩波文庫）とあるところから分かる。クラデー *κράδην* が「イチジク（シューケー *syke*）の小枝」を意味する用例は『平和』627にも見られる。次行の「訴訟」とあいまって、ここにはシューコパンテース *sykophantes*（何かと口実を見つけては訴えと脅して金をゆすり取ることを生業とする男）との連想が含まれているであろう。アリストテレスは、大きくてよく歌うのを「ナキゼミ（アケタ *akheta*/エケテース *ekhetes*）」といい、オリーブの木のあるところに特に多い、と記している（島崎訳『動物誌』556a20）。セミはイチジクの小枝にとまることが多いということではないであろう。
- 30) 前5世紀のアテーナイ社会において訴訟が頻繁に行われたことはアリストパネスの他の作品にも表れている。『雲』では、地図上に示されたアテーナイを見ながらストレブシアデースが「裁判人たちが座っているのが見えない」といって、その場所がアテーナイであることを認めないシーンがある（206行以下）。
- 31) アシで編んだ籠（カヌーン *kanun*）は生贄の儀式に必要なナイフなどの用具を入れて運ぶのに使用する。土鍋（キュトラー *khytra*）はテラコッタ製の料理用鍋であると思われるが、都市建設の儀礼に使用する火を持ち運ぶための壺（火のついた炭を入れておく）とする解釈もある。したがって、357行以下で鳥たちとの戦闘で使用するキュトラーがここで言及されているものか、他の荷物とともに運ばれているものか議論が分かれている。ミュリネー *myrrine*（ミルシネー *myrsine*）はギンバイカのことであるが、ギンバイカの枝あるいは花冠を指すこともある。儀礼の参加者はギンバイカの枝を手持って行進したり、ギンバイカの花冠をかぶったりする。これらの小道具をエウエルピデースとペイセタイロスが自分で運んでいるのか、それとも2人に付き従う2名の奴隷（名前がクサンティアースとマーノドーロスであることは656行以下で判明する）が運んでいるのかは議論が分かれている。市民が旅行する際に、毛布などの寝具や食器の類を運ぶ奴隷を連れていることは普通である。
- 32) 「煩わしさのない場所 *topon apragmona*」とは、ここでは訴訟に関わらずにすむポリスのことである。政治的な文脈で使用されるときには、ポリスの政治に関わることを避け、対立抗争に加わらずに静観する態度を指すが、これは非難の対象ともなる。ペリクレスは追悼演説の中で「吾々のみが国事に参与しない人間を閑雅な人（*apragmona*）ではなく無益な人とみなす」と述べている（トゥーキューディデース『歴史』2.40. 藤縄謙三訳）。

話者の割り振りの対照表

Dunbar 1995		Sommerstein 1987		Henderson 2000		Rogers 1930 (1906)	
行	話者	行	話者	行	話者	行	話者
1	Euelpides	1	Peisetairos	1	Euelpides	1	Euelpides
2	Peisetairos	2	Euelpides	2	Peisetairos	2	Peisetairos
3-4	Euelpides	3-4	Peisetairos	3-4	Euelpides	3-4	Euelpides
5-6	Peisetairos	5-6	Euelpides	5-6	Peisetairos	5-6	Peisetairos
7-8	Euelpides	7-8	Peisetairos	7-8	Euelpides	7-8	Euelpides
9-10	Peisetairos	9	Euelpides	9-10	Peisetairos	9-10	Peisetairos
		10	Peisetairos			10	Euelpides
11	Euelpides	11	Euelpides	11	Euelpides	11	Peisetairos
12a	Peisetairos	12a	Peisetairos	12a	Peisetairos	12a	Euelpides
12b	Euelpides	12b	Euelpides	12b	Euelpides	12b	Peisetairos
13-22a	Peisetairos	13-22a	Peisetairos	13-22a	Peisetairos	13-22a	Euelpides
22b	Euelpides	22b	Euelpides	22b	Euelpides	22b	Peisetairos
23-24	Peisetairos	23	Peisetairos	23-24	Peisetairos	23-24	Euelpides
		24	Euelpides			24	Peisetairos
25a	Euelpides	25a	Peisetairos	25a	Euelpides	25a	Euelpides
25b-26	Peisetairos	25b-26	Euelpides	25b-26	Peisetairos	25b-26	Peisetairos
27-48	Euelpides	27-48	Peisetairos	27-48	Euelpides	27-48	Euelpides
49a	Peisetairos	49a	Euelpides	49a	Peisetairos	49a	Peisetairos
49b	Euelpides	49b	Peisetairos	49b	Euelpides	49b	Euelpides
49c-50a	Peisetairos	49c-50a	Euelpides	49c-50a	Peisetairos	49c-50a	Peisetairos
50b-53	Euelpides	50b-53	Peisetairos	50b-53	Euelpides	50b-53	Euelpides